

# 幼児体育指導者の動感認識に関する一考察

荒井迪夫・中西一弘

(2012年10月14日受理)

## 要約

幼児体育の指導場面では指導者による示範は不可欠である。

将来保育者として運動指導に当たる本学学生にとって、日常生活や運動遊びの基本的な動き方を学習して動感（キネステーズ）発生から動感形成に至る能力を獲得すること。さらに、それらの運動の「運動構造」を理解したうえで「動き方のコツ」を自身のキネステーズとして認識することで、より生き生きとした言葉による実践的な指導が可能となる。

また、同時にその運動の類似運動（アナログン）をできるだけ多く学習し、運動指導に取り入れることも子どもたちの動感発生につながり、後の動感形成に役立つ。こうした一連の「運動伝承を効果的に行うための学生の促発能力をいかにして高めるか」について考察した。

**キーワード** 幼児、運動、動感（キネステーズ）、類似運動（アナログン）、模倣、促発

## I、幼児期の運動指導の重要性

マイネルは、行為としてのスポーツ運動に関して「スポーツ運動を習得して行くことは、環界とのたえまざる対峙の中でのみ可能となり、言語と思考がなければ存在し得ない」とし、さらに対象領域の詳細な規定の中で、「人間全体として身体的、心理的、精神的な力を総動員して課題解決に働き掛けていく。その様な運動が教育学の運動学の対象領域に属するのである。このことは運動課題が努力する価値を持つ目標であらねばならない。」として運動習得の教育的価値と運動課題の選び方について述べている。<sup>1)</sup> また金子も、「人間の一生の中でこの時期が最も運動の形態発生が顕著であるが保育所や幼稚園の先生といえどもその運動形成の指導が重要な意味を持つという認識も十分とは言い難い」<sup>2)</sup> としており、幼児期の運動にあっては、様々な運動を学習することによって運動感覚を養い、身体知を高めることが最も期待できる時期であることを示し、同時に幼児の運動指導に当たる保育者の運動に対す

1

る認識の現状をも憂いている。

過去に実施した女子短大生を対象とした「運動嫌い」に関する調査によると、幼児期に運動が「嫌い」だった割合5.4%が、小学生低学年になると10.4%、高学年で12.7%となり、さらに中学生では19.9%に増加した。そして、「嫌いになった」と答えた学生のうち、その原因が「能力が劣る・自信がない」と「心理的な傷つき体験」を含めると80%にのぼっている。<sup>3)</sup>

幼児期における運動遊びでは「出来る・出来ない」を、あまり気にせず楽しみながら行われているが、小学校に入学すると学習内容が明確に示され、学習指導要領による方針の①で「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点を重視し各種の運動の楽しさや喜びを味わうことが出来るようにするとともに児童の発達の段階を踏まえ指導内容の明確化を図る。」<sup>4)</sup>として、楽しさや喜びを味わう、ともしているが、定められた様々な運動を行い、学年が進むに従って次第に高度になり、出来不出来が明確になる。

そこではすでに幼児期の運動経験による能力差が浮き彫りになり、「苦手意識」が年齢とともに影響する度合いを増し、動感に対しての問題意識を持たずに行われている幼児体育が、子供の将来を形作っていることを認識すべきである。

そして幼児期には単に運動を楽しむ事のみにとどまらず、適切な運動指導により多くの運動に親しみながら適切な運動課題に積極的に取り組んで、各々の運動の動感発生を促すことが重要である。

## II、幼児の動感発生と本学学生の現状

幼児の動感発生については模倣によって行われることが多くの研究者の文献により明らかである<sup>5)</sup>が、模倣の本質について金子は「他者の運動を自らの運動感覚時空系のなかでとらえ、他者の動き方を読み解き、そこに運動感覚能力によって潜入していくところに、初めて生命ある人間の運動模倣の地平が拓かれるのである。」<sup>6)</sup>としている。

また、さらに「子どもに新しい動きを教えるのは大変難しく、特に、いわゆる鈍い子の指導は難渋を極めます。まねをさせるという営みに入るのは、まねたいという原衝動をもたせなくてはなりません。気に入らない先生や、興味を感じない動きには子どもは何の遠慮もなくそっぽを向いてしまいますから指導に入ることさえできません。」<sup>7)</sup>と子どもの模倣のむずかしさを説いている。

また、塩野も「幼児の動感形成については、単なる方法論上の手法に終始するのではなく、『真似したい』という原衝動を呼び起こす場をどうもたせるかが重要になる」<sup>8)</sup>と雰囲気づくりの重要性を述べている。

そして、その為に運動指導者は、運動遊びの中で子どもが注目し、やってみたいと思わせるような楽しい運動の示範が出来ることが重要となる。

保育者をめざす本学学生は当然、幼児の心と体の発達について詳しく学び、さらに表現技術についても多くの科目において学び、またさらに数多い実習によって実践する機会もある

ことから、幼児の気持ちに沿った適切な対応が可能と思われる。そして、こうした学びの現状は金子の言う「まさに子どもの動感身体にとって動きたくてしょうがない場づくり」<sup>9)</sup>には打って付けであると言えよう。

つまり、幼児の動感発生に求められる指導者の資質としては、

- 1、子どもが真似たくなるような分かりやすい示範の仕方
- 2、子どもが動きたくてたまらなくなるような楽しい場づくり
- 3、その場における受け手である子ども一人ひとりの状況の把握

などが必要であることがわかったが、運動の示範については、現在は学生自身の動感形成を目標とした学習を主に行っているため、子どもが興味を持つ雰囲気と示範まで望むことは現状では難儀であろうと思われる。

また、子どもの状況の把握については、運動遊びのなかでのみならず日常の保育場面での子どもとのかかわりの中で、一人一人の性格、行動、家庭環境等の観察による気付きによって可能となるであろう。

### Ⅲ、本学授業における指導目標

本学の体育実技の授業では、将来、保育者になる学生が子どもの動感発生に寄与出来るよう、多くの基本的な運動を課題として提示し各々の課題について実技学習を行っている。そしてこの学習によって学生自身のキネステーゼが保育者として必要な形態化位相に到達することを目指している。

しかし、子どもの動感発生を容易にし、さらに動感発生から動感形成へと発展させられるような促発能力までには及ばずに来ていたのが現状である。

今年度は、保育者として子どもの動感発生に向けて、より具体的な指導が出来るようにすることをめざすこととした。

そのため個々の課題を学習して形態化位相に至る経過のなかで学生自身がキネステーゼを認識し、認識したキネステーゼを文章によって記述（表現）出来るようにすることによって促発能力を多少でも高めることを目標とした。

そして、そのために、年度開始より7月までの90分×12（回）の授業において学習した課題の中から次の4課題を取り上げ、偶発ないし形態化位相に達したと思われる学生に対して、学生自身が自己の運動感覚を思い起こし、文章による記述（表現）を課すことを試みた。学生の中には記述の苦手な者も居り、明確に表現できるかどうかの疑問もあったが全受講生（5クラス・約250名）を対象に行った。

なお、形態化位相に達している学生が比較的多い、ダルマ転がり、壁倒立、トランポリンの3課題については各々2クラス（約100名）を対象に、また、踏み切り逆上がりについては、形態化位相に達していない学生が多いため4クラス（約200名）を対象とした。

記述は以下の質問にて行った。

次の運動について自分の感じを出来るだけ詳しく表現して下さい。

課題名 「・・・・・・・・」

- 1、身体の何処をどのように動かしているか考え、順を追って自分の感じで表現して下さい。
- 2、出来るためには、ここがポイント（コツ）だと思ふ身体の動かし方があれば述べて下さい。

## IV、授業における実技学習

授業における課題の学習に当たっては、各々の課題について「コツ」の発生に直接関与すると思われる技術情報<sup>10)</sup>として2～4項目についての説明を加え、課題によってはさらにキネステゼアナログンとして幾つかの運動を練習の後、課題の学習に入った。

4 課題とその学習内容及び手順は次のとおりである。

### 課題Ⅰ 『ダルマ転がり』

坐位で足裏を合わせた姿勢で横に回る。（マットを使った運動遊びとして）

技術情報

- 1、真横に回転する（前方でも後方でもなく）
  - 2、右（左）膝に肩を近づけて（着けて）回転し、左（右）肩に膝を近づけて（着けて）起き上がる。（回転の開始・起き上がりともに肩と膝をつけるようにして行う）
- \*この課題は学生にとってはなじみのない運動だが、危険性も全くなく取り組みやすいため  
に簡単な説明ののち坐姿勢からただちに実施した。

### 課題Ⅱ 『壁倒立』

壁に向かって脚を前後に開いて立ち両手を床に着いて足の蹴りと振り上げによって壁に足をつけた倒立になる。

技術情報

- 1、両腕を伸ばして床に着く
- 2、後ろの脚を振り上げる
- 3、前の脚で床を蹴る
- 4、からだをしめる（腹・臀）

\*体の姿勢保持のために「背支持倒立」を毎回実施。

\*技術情報1～3の学習のため、床で両手支持して足を前後に開いた姿勢から蹴りと振り上げの練習を毎回実施。

\*両腕支持（体の支え）の学習のために、両足を振り上げた状態で両足をたたく練習を随時学習（別課題として）

\*3名1組で互いに幫助をし合う。実施者の両側に幫助者が立ち、脚の振り上げから倒立姿勢の保持までを自力で行うことを前提に、加える力の加減をしながら幫助し倒立の学習を実施。

### 課題Ⅲ トランポリン『ジャンプ』

トランポリンの中央に軽く足を開いて立ち、トランポリンの弾みを利用してのジャンプから計9回のジャンプの中で次の運動を実施し、最後は安全に停止する。

①・②ジャンプ ③ジャンプ1／2ひねり ④ジャンプ ⑤ジャンプ1／1ひねり ⑥ジャンプ ⑦空中で開脚屈身姿勢 ⑧ジャンプ ⑨シートドロップ ⑩屈膝・直立 停止

#### 技術情報

- 1、体を常に両足の中央に置き前後左右に移動しないでジャンプ。
  - 2、脚を肩幅程度開き、腰部・腹部・臀部に力を入れ上体を安定させる。
  - 3、足裏全体でベッドを踏み込み、ベッドの跳ね返りにタイミングを合わせてジャンプする。  
停止するときはベッドの跳ね返りを膝と腰の曲げにより吸収する。
- \*大多数の学生は初めて行う運動のため、念入りな説明の後実施。危険防止のため、停止の方法を含めたジャンプの練習を念入りに学習の後課題に入った。  
\*注意事項が多いため、覚えるのに多少時間がかかった。

### 課題Ⅳ 低鉄棒『踏み切り逆上がり』

バーの近くに立ち、片足で床を蹴りながらもう一方の足を、上を通過して後ろに振りながら後方に回転して腕立て支持になる。

#### 技術情報

- 1、踏み切り足はバーの少し前の床に着き、床をけて体を上昇させる。
  - 2、振り上げ足は上から後ろに向けて振り上げる。
  - 3、腕を腹に近づけ肩角度を狭める。
- \*次に逆上がりについては、昨年までの授業の中での学生の様子から、逆上がりの要素の一つである『後方への回転』が全く分からない学生が居り、最初の条件として後方回転に慣れるため「アナログン」として、4種類の運動を全学生に経験させた上で逆上がりの練習にはいった。
- ①マット上での後方回転（坂にして頭が邪魔にならぬよう段差をつけ）
  - ②よじ登り用ロープ2本を両手で握っての後方回転。
  - ③よじ登り用ロープを使っての後方回転を、こんどは片足を積極的に上から後ろに振り上げてのけんすい回転。
  - ④低鉄棒でけんすいから脚抜き回り。

なお、「踏み切り逆上がり」は、早い学生は幼児のころから経験し、遅い学生でも小学校高学年には経験してきている。しかし、正しい指導を受けずに学習してきた学生が多く、動感発生に至らない学生が多いだけでなく誤った動感認識のまま現在に至っているために、正しい技術情報に馴染めないでいる学生も多い。

また、学習方法として、

\*とび箱を台にしてそこに踏み切り足を乗せ「踏み切り」「振り上げ」を強調する。

- \*ロイター式踏み切り板を斜めに起き、そこで踏み切って実施。
- \*帯を体に巻きつけ、バーに身体を近づけた状態での実施。  
等を行った。

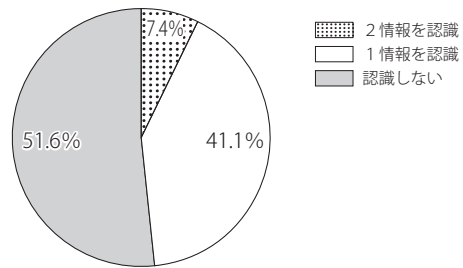
## V、動感の認識度と記述内容の例

各課題において、学生に示した技術情報（2～4項目）のうちの幾つの技術情報を自分の動感として認識・記述できているかをまとめ表とグラフに示した。

さらに、教師が示した表現を学生がどう受け止め、自身の動感として記述しているかを例としてそのまま転記した。

### 課題Ⅰ 『ダルマ転がり』

	数	%
2 情報を認識	7	7.4
1 情報を認識	39	41.1
認識しない	49	51.6
計	95	



(図1) デルマ転がり

#### ○記述例

##### 2 情報を認識

- \*勢いよく横に転がる。上腕部→肩→肩甲部→肩上腕部の順で床につけ転がる。
- \*真横に倒れるイメージで、太ももの外側、肩、肩甲骨、肩の順番に移動する。

##### 1 情報を認識

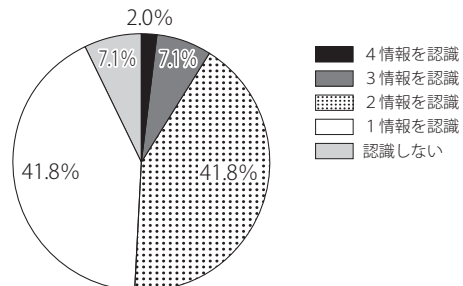
- \*真横に体重移動させ、傾いてきたら楕円を描くように体重移動させる。

##### 認識なし

- \*あまり力を入れないで、流れに任せてまわる。
- \*右肩・腰をつけ円を描くように転がり。最後に起き上がる時にももが地面につく時勢いと腹筋を使って起き上がる。
- \*体で起き上がろうとせず、回っている勢いや、足→体→の順で元に戻す。自分が回りやすいと思う方向で回る。

### 課題Ⅱ 『壁倒立』

	数	%
4 情報を認識	2	2.0
3 情報を認識	7	7.1
2 情報を認識	41	41.8
1 情報を認識	41	41.8
認識しない	7	7.1
計	98	



(図2) 壁倒立

○記述例

3 情報を認識

- \* 足で地面をけり、足が垂直になったら腹筋に力を入れて、腕を曲げないできちんと支える。
- \* うでを使って体全体を支えている。足で力いっぱい地面をけりあげ腕で支える。  
地面をけりあげ、壁の方へあしをあげる。

1 情報を認識

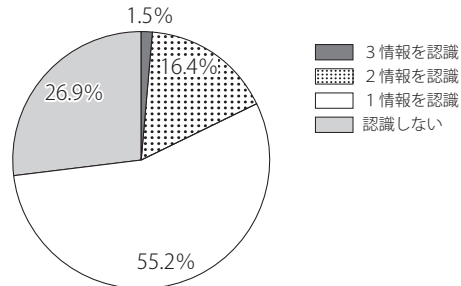
- \* 勢いよく手を床につけ、足で床を蹴って壁に足をつけるとできる。
- \* 勢いをつけてから、壁につくような感じで足を振り上げる。
- \* 「せーの」で手をハの字に着き足を振り上げ、壁につける。

認識なし

- \* まずは怖がらないこと。膝が伸びなかったら壁をける感じで。手を前につきすぎないことと内側に入れない。

**課題Ⅲ トランポリン『ジャンプ』**

	数	%
3 情報を認識	1	1.5
2 情報を認識	11	16.4
1 情報を認識	37	55.2
認識しない	18	26.9
計	67	



(図3) トランポリン

○記述例

2 情報を認識

- \* トランポリンの中心に立ち、バランスを保って両足で立つ。両腕を上振り上げ、そのすぐ後に両足を少し曲げて真上に飛ぶ。両腕でバランスをとる。

1 情報を認識

- \* トランポリンの力に任せて体全体を浮かす。大腿や膝を使ってバランスをとり着地。
- \* 筋肉を対角的に使いながらジャンプする。へそから身体の軸を立て、膝を上手く使ってバランスを取りながら跳ぶ。
- \* 膝を曲げずに垂直に飛び、トランポリンが沈んだ時、上に飛ぶ。
- \* 助走をつけ、飛び跳ねて足がトランポリンに着くと、同時に足を曲げて勢いを増させる。

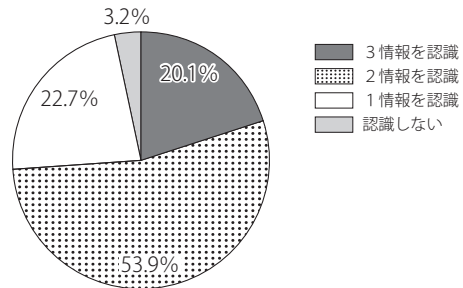
認識せず

- \* まず膝が一番大事で、トランポリンからおりたあと、ジャンプするとうまく跳べなくなることは、膝の感覚がトランポリンの時沈むため床でやると、弾みがなくなり膝も曲げることをやめてしまう。



課題Ⅳ 低鉄棒『踏み切り逆上がり』

	数	%
3 情報を認識	31	20.1
2 情報を認識	83	53.9
1 情報を認識	35	22.7
認識しない	5	3.2
計	154	



(図4) 踏み切り逆上がり

○記述例

3 情報を認識

\*地面を方足でけり、もう片方の足を振り上げる。おへそを鉄棒から離さないようにまわる。

\*前足は地面をけり、後ろ足は振り上げる。鼠頸部を鉄棒に近づける。

2 情報を認識

\*地面を勢いよく蹴る。棒が太ももの付け根にくるよう腕で引きつける。

\*床を蹴り上げ、膝を軽く曲げる。遠心力、気合い、努力。

\*「トーン」のリズムで足を振り上げる。鉄棒にお腹を巻きつけるように回る。

1 情報を認識

\*リズムよく踏み切り足を使う。手は肩幅くらい。足を上げたらおへそを見る。

\*うでに力を入れて足をあげてお腹がつきそうになったらそのままの勢いでまわる。

認識せず

\*鉄棒とからだをできるだけ近づけて、勢い良くいくこと。

Ⅵ、考察と今後の課題

\*記述に際して、事前に身体各部の名称について確認したことによって正式名称による記述が多く見られたが、反面、おなか・もも等の俗称も多く使われていた。

\*各課題について、提示した技術情報と違った表現が多いことをみると、説明が徹底できなかったことの表れと思われる。

8

\*技術情報を「認識せず」が「ダルマ転がり」51.6%、「トランポリン」が26.9%と、この2課題についてはある程度は認識せずとも出来てしまう学生が比較的多かった。

\*ダルマ転がりは、体勢は多少の違いはあるが「寝返り」に似て恐怖感もなく容易に出来る。ダルマ転がりそのものは初めての運動だが、寝返りに象徴されるように、アナログンを多く経験しており、やってみると出来てしまう。まさに金子の「即座習得で成功し



てしまう人は、その習得課程が極端に短縮されている。そのために往々にして自らの習得課程を刻明に省察しないで技の背景に沈めたままにしていることが多い。」<sup>11)</sup> そのものであると言えよう。

\*トランポリン（ジャンプ）については、トランポリンにおける弾みは、全く初めての者が多いが、運動（ジャンプ）そのものは日常運動と全く同じで、また、多くの子どもがソファやベッドでのジャンプを経験していることなど、アナログンそのもので、トランポリンの弾みに慣れるとやはり即座習得に近いと言えよう。

また、「停止」時の身体の動きをみると、床における直立姿勢と同様と認識している学生が多く、トランポリンの弾みが十分に認識できていないことが分かった。

\*「ダルマ転がり」「トランポリン」とは対照的に、技術情報を「認識せず」が「壁倒立」7.1%、「逆上がり」3.2%と非常に低い値である。

共に非日常性の運動で、ある程度「コツ」を意識しないと出来ない運動であると言える。

これは、「二つ以上の技術情報を認識している」、が「壁倒立」は49.1%、「踏み切り逆上がり」では74.0%と比較的高率となっていることから理解できよう。

\*壁倒立は、子どもにとっては馴染みやすい楽しい運動であるが、18・9歳の女子学生にとっては自分の身体を腕のみで支え、それも倒立位という馴染みのない体勢で、かなり難易度の高い運動だと言えるが、毎回の授業で多くのアナログンを経験しているために、キネステーズが少しずつ認識されてきているものと思われる。

\*「逆上がり」は形成位相の遅れている学生が一番多い運動である。大多数の学生は幼児の頃から経験しているようだが、間違った指導により、誤った癖が身についており気の毒とも思える状況もある。キネステーズをしっかりと認識することで実施可能となるであろう。

\*昨年も位相の遅れが目立ったために、特にアナログンの学習を試みたが、倒立のように毎回の実施が出来なかったこともあり、効果をあげるには至らなかった。今後の課題となろう。

\*今回は4課題についての記述であったが、課題の種目特性が学生の認識状況に顕著に反映されるようにすることを今後の授業テーマとして、課題の設定に生かしたい。

\*今回の調査を振り返ってみると、授業の目標である学生のキネステーズ認識について、種目による偏りはあるが、自分の動きを文章にすることで学生自身が問題意識として捉えることができつつあると思われる。

従って今後さらにキネステーズ認識を高めるには、キネステーズについて運動学習の偶発位相の段階で「出来なかった時との違い」を。そして、形成位相に達したときには、さらに詳細な「キネステーズについての問いかけと記述」を行うことによって「動き方のコツ」を自身のキネステーズとして認識可能となるようにする。

そして、そこに至ったアナログンを振り返ることによって効果的な運動指導に役立たせることが出来るようにしたい。

#### 引用・参考文献

- 1) クルト・マイネル著、金子明友訳「スポーツ運動学」大修館書店 1981. p98
- 2) 金子明友 「技の伝承」明和出版 2002. p61
- 3) 荒井迪夫、周東和好「淑徳短期大学研究紀要」第42号 2003. p17
- 4) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 体育編」2008. p5
- 5) 荒井迪夫 「淑徳短期大学研究紀要」第48号 2009. p99
- 6) 金子明友 前掲書2) p313
- 7) 金子明友 「児童文化入門」岩波書店 1996. p152
- 8) 塩野克己 「伝承」第11号 運動伝承研究会 2012. p1
- 9) 金子明友 「身体知の形成 上」明和出版 2005. p199
- 10) 金子明友 「マット運動」大修館書店 1982. p i
- 11) 金子明友 前掲書2) p381